サワッタの動物・植物　岡山県新見市哲西町

鯉が窪の湿原

国指定（昭和54年）天然記念物

吉備高原の北辺の一部鯉が窪池の上手、標高550mのところに太古からの姿をもちつづけている秘境がある。

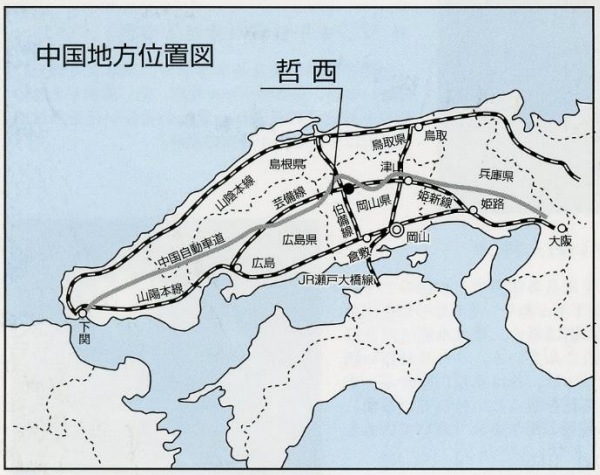
この地方の人は「サワッタ」とよび、物ほし竿をさしこむと全部入ってしまうほどの深みがあるといい、ここへ来ることをきらっていたが、いまは訪れる人が多く、ここの植物の大群落の神秘さに魅了される。

鯉が窪湿原保護保存要旨

鯉が窪池の池辺ならびに、付近の湿原は、高梁川の小支流の水源地の山間に残された日本太古の自然の姿を保つ地域であって、ここには北方系・満朝系の残存植物をはじめ、日中共通植物や、日本固有植物その他の湿生植物・水生植物の多種類が生育している。また、数種の湿棲昆虫その他の昆虫も発生し、西部本州の湿原を代表する学術上貴重な地域である。この地域の自然環境と植物および昆虫などを保護し、保存することが必要である。

1．湿原ならびに池辺の湿生植物及び水生植物（池中も含む）の採取・刈取りの禁止。
2．湿原ならびに池の周囲に設けた歩道は通行してもよいが、オートバイ・自転車等での 通行は禁止。
3．この地域内でのタバコは休憩所のみとし、それ以外は禁煙とする。また、焚火は禁止 。
4．湿原内はもっぱら木橋を通行し、湿原内への立入は禁止。(一度踏みつけられた植物は復元するのに、長い年月がかかる。)

湿原のある町　新見市哲西町（てっせいちょう）



鯉が窪湿原へは…

車で（新見、東城から国道182号線を利用）

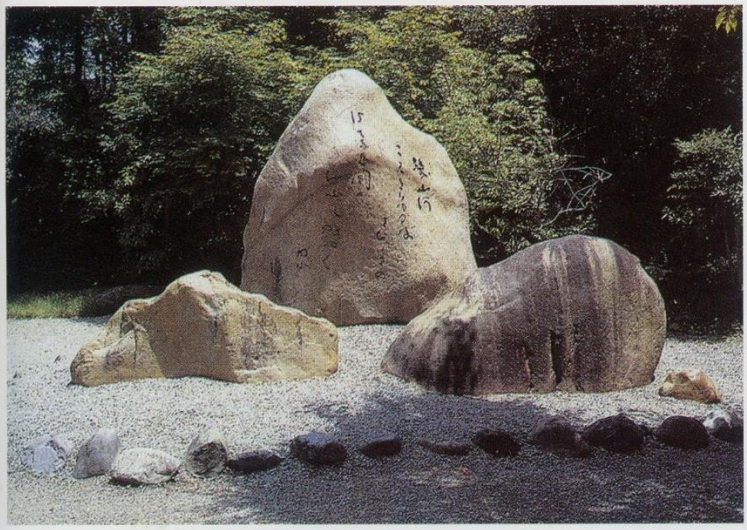
★中国自動車道大阪・吹田I.Cから新見I.C経由で3時間20分
★中国自動車道広島北I.Cから東城I.C経由で1時間30分
★米子から哲西まで2時間
★四国・坂出から瀬戸大橋経由哲西まで2時間30分
★岡山から哲西まで2時間20分

中国ハイウェイバスで（新見からJR芸備線を利用）

★大阪・梅田から中国新見まで3時間30分

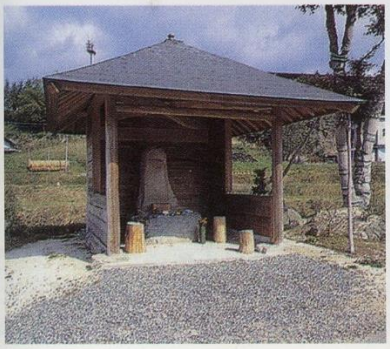
電車で（JR芸備線矢神駅下車徒歩40分）

★大阪から哲西まで（新幹線岡山経由）2時間20分
★広島から哲西まで（新幹線岡山経由）3時間
★米子から哲西まで1時間40分
★四国・坂出から哲西まで（瀬戸大橋経由）2時間30分



若山牧水の歌碑

幾山河…と詠んだ若山牧水の歌碑。
二本松峠から東に50m程のところの旅籠跡に、歌人若山牧水の〈幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく〉喜志子夫人の〈あくがれの旅路ゆきつゝ此処にやどりこの石文のうたは残しゝ〉長男旅人氏の〈若くしてゆきにし夫のかたわらに永久の睦みをよろこばむ母は〉の、牧水親子の三歌碑が立っている。
若山牧水の〈幾山河……〉の名歌は、早稲田大学在学当時の明治40年、宮崎へ帰る途中、田山花袋の“蒲団”の舞台となった新見市を訪れるため、総社の湛井から備中路に入り、高梁、新見を経て、恋人園田小枝子のいる安芸の国へ向かう途中、ここの茶店でもある旅籠の熊谷屋に泊まった。このときつくられたのが、この歌だといわれている。

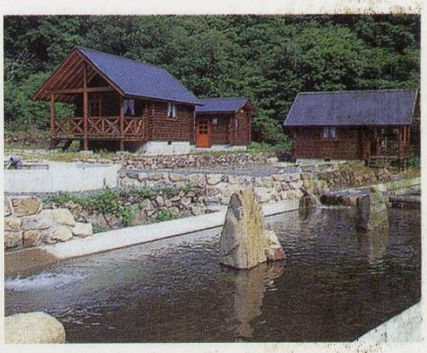


矢田線刻阿弥陀如来坐像（矢田石仏）

高さ1.2mほどの石英斑岩の正面を、裾広がりの長方形に浅く彫り沈め、二重輪光を負い蓮華座で阿弥陀如来像を線彫に表している。石仏の左側に「石造立之志者為如意往生極楽也」の銘があり、供養塔として建立されたものと思われる。文永2年（1265）の鎌倉時代に造られており、石仏として岡山県でも古いものの一つになっている。

二本松峠（国境）

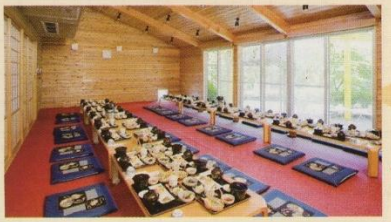
広島県に接する県境に、二本の石柱が立っている。石柱には東に「従是東備中国」西に「従是西　備後国」と彫られている。



千子農村リゾート

岡山県の西北部に位置している新見市哲西町は、自然の宝庫である。
町北部にある千子地区は、四方を緑濃い山々に囲まれ水も豊かで、おいしい米の産地としても有名である。（県の棚田天然米の指定）
夏は清く澄んだ千子川の流れのように、その清涼感は格別です。
又、冬の千子川は清流魚あまごの釣場として楽しめる。
宿泊は千子地区のいろりの家と、ログハウス4棟が用意されている。いろりの家では囲炉裏を囲んで、のんびりと山間の夜を満喫できる。

道の駅
鯉が窪



◀大広間
観光バスや団体での食事ができます。

山野彩館

昔ばなしの里

野菜市場

● 観光のお問い合わせは

鯉が窪管理事務所　道の駅「鯉が窪」

☎(0867)94-2347　☎(0867)94-9017

新見市ホームページ　http://www.city.niimi.okayama.jp

◀ ムラサキミミカキグサ〔たぬきも科〕

湿地に生える小型の多年草で、白い糸のような地下茎が地中を浅くはい、それに虫を捕る小さな袋をまばらにつけている。また、地下茎のところどころから細いヘラ形で先が丸い10cm程度の葉を地上に出し、上部にまばらに数個の花をつける。捕虫袋には扉があって虫が触れると、水とともに虫を吸い込み、バクテリアが虫を分解する。それを横取りして自分の栄養分にする。

ハンカイソウ〔キク科〕▶

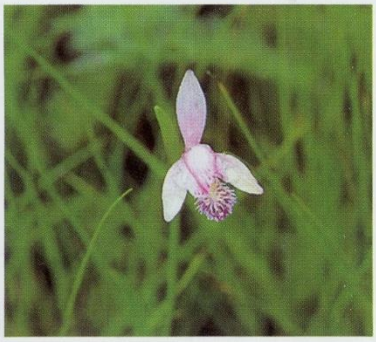
山地の湿った場所に生える多年草で、茎の高さは80cm程度となる。根元から出る葉は長い柄をもち、茎に付く葉は柄が短く鞘になって茎を抱く。初夏茎の先に枝を出し、その先に鮮やかな黄色の頭状花をつける。その名は「史記」にでてくる中国の英雄からきたもので、男性的な姿の草であることから名づけられたという。

◀ クサレダマ〔さくらそう科〕

日の当たる湿地に生え、池辺や堤防の下の湿地に見られる。地下茎を引き群生する多年草で、茎は直立し50cm程度となる。葉は対生か３～４枚輪生し、まばらに黒点があり、下面の基部には小さな繊毛がある。７～８月茎の上方に多数の黄色の花をつける。

トキソウ〔らん科〕▶

湿地に生える多年草で、茎の高さは15cm程度、地中に数本のひげ根をひろげ、茎の中程に１枚の葉がつき葉柄はない。５～６月茎の先に１個の紅紫色の花を開く。トキの羽毛の色に似ていることからつけられた名である。



◀ サギソウ〔らん科〕

日当たりのよい湿地に自生する多年草で、茎の高さは20cm程度、横に地下茎をのばし、その先に球茎ができ、しだいに株が増える。花は純白で、茎の先に１～４個の花をつける。花は白サギが翼をひろげて飛んでいる姿にそっくりである。日本にだけある植物で、日本を代表する植物の一つである。

ノハナショウブ〔あやめ科〕▶

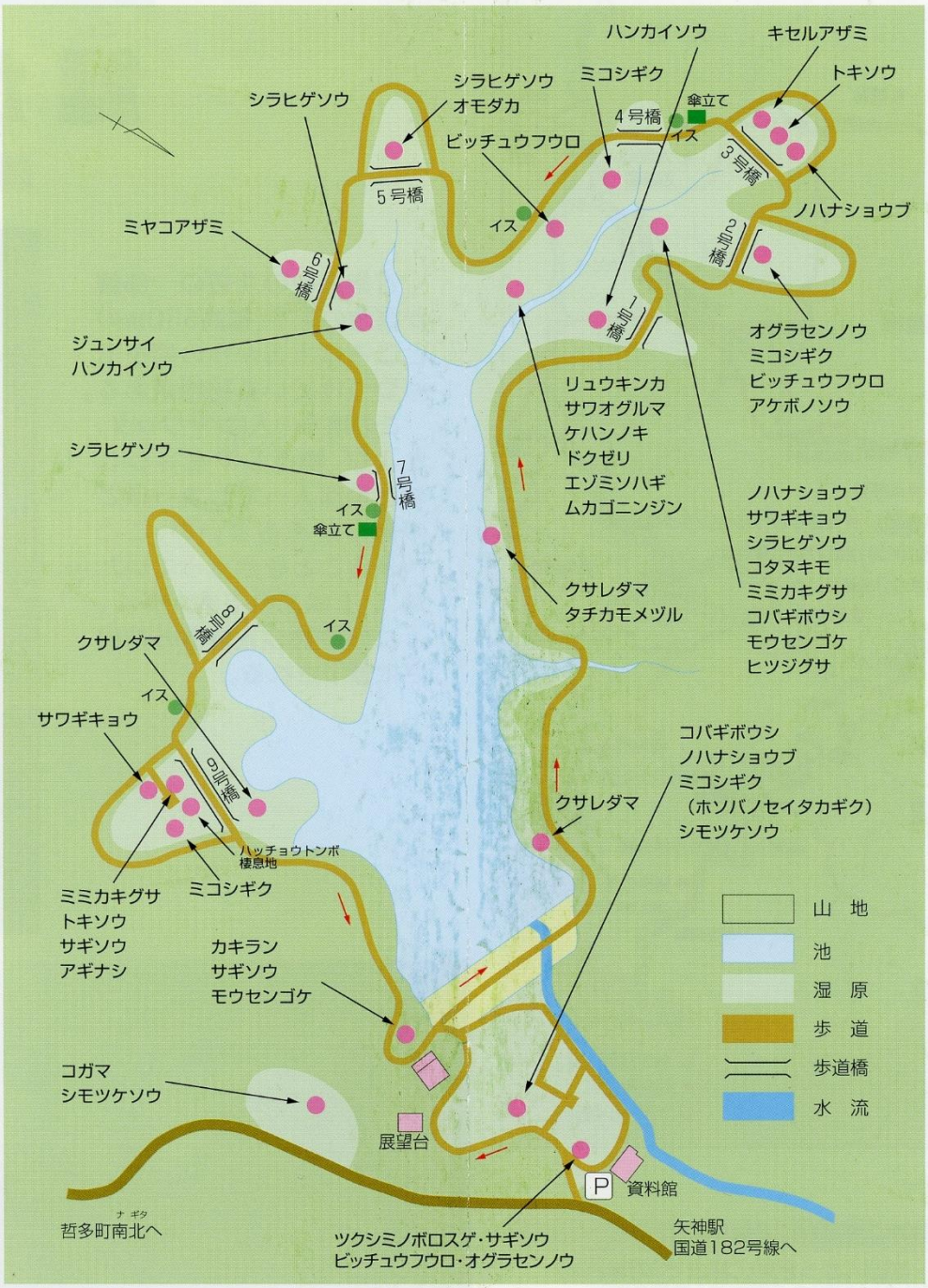
栽培のハナショウブの原種である。多年草で水中には生えない。地下に太い根茎があり、高さ１m程度である。６～７月にかけて赤みを帯びた紫色の花をつける風情は格別である。

◀ カキラン〔らん科〕

茎は高さ30cm程度、基部は紫色を帯びている。葉はせまい卵形で先がとがっている。６～７月にかけて１茎に10数個横向きに花を開く。がくは緑褐色、花弁は橙黄色、唇弁は節があって上下に分かれており、白色で内面は紅紫色の斑点がある。内花被の上の２片が熟れた柿の実の色をしているのでつけられた名である。

鯉が窪湿原と付近の要図

（岡山県新見市哲西町矢田矢田谷）



◀ ハッチョウトンボ〔とんぼ科〕

6～8月にかけて発生する。日本産とんぼ科で最小のもので、愛知県の八丁なわてに居るので名づけられた。

ミコシギク〔きく科〕▶

湿原の日当たりのよい場所に生える多年草で、茎の高さは50～100cm程度。葉は細く羽裂している。9～10月に花を開く。神輿槍に似ていることから名付けられた。一名のホソバノセイタカギクも全体の姿を表した名である。

◀ オグラセンノウ〔なでしこ科〕

この湿原を代表する植物の一つである。多年草で、茎の高さは80cm程度、葉は細長く先が尖っている。7～9月にかけて茎の上部に数個の紅色の花を咲かせる。今では限られた地域にしか見られない珍しいものである。

ビッチュウフウロ〔ふうろう科〕▶

湿地に生える多年草で、茎の高さ30～40cm程度、葉は薄く5裂し、裂片の先はさらに3裂している。7～9月、細長い柄の上に淡紅紫色の濃い紅色の脈が目立つ花を2個ずつ付ける。一名をキビフウロという。

◀ シラヒゲソウ〔ゆきのした科〕

山中の陰湿地や湿原に群がって生える多年草である。数個の無柄の茎葉をつけ、心円形で基部は茎を抱く。花は8～9月茎の頂きに一つつき、白色でふちは糸状に裂けている。それが白いひげのように見えるのでこの名がついた。

リュウキンカ〔きんぽうげ科〕▶

5月初めケハンノキ林の下一面に黄色な花を開いてすばらしい美観をあらわす。泥のなかに白くて丈夫な根をおろし、地上の茎の下部につく葉は長い柄があって円形。茎の上部から出る葉は、ふつう柄がない。黄色な花びらのように見えるのはガク片で、花弁はない。茎が立つことから、「立金花」と名がついた。

◀ サワギキョウ〔ききょう科〕

山間の湿地に生える多年草で、茎は太く直立し分岐しない。高さは80cm程度。低い鋸歯がある。8～9月総状の花順に、紫色の美しい花をつける。名は沢に生えるキキョウの意味。

ヒツジグサ〔すいれん科〕▶

池などの水中に生える多年草で、水底の土中に太く短い直立した地下茎があり、それから根を出し、また葉を出す。葉の柄は長く、葉は水面に浮かび、円形で基は深く切れこんでいる。6～9月長い柄の先に白い花を1つつけ、花は水面に浮かぶ。未の刻（午後2時）に花を開くといわれているが、午前10時すぎから午後5時すぎまで咲いているものが見られる。

鯉が窪池は、300年昔の元禄8年（1694年）に潅がい用水池として築造され、安政年間（1854年～1860年）に当時の備中松山藩主板倉氏が修築したと伝えられ、満水時の面積は約2.7ヘクタールあり、下流の水田約45ヘクタールを潤しています。湿原はこの池の上流に集中して広がり、面積3.6ヘクタールで、一周すれば、2.4キロメートルあります。この湿原には、満朝系の残留植物をはじめ、日中共通植物や寒地植物、日本固有植物、その他周辺の植物を含め、およそ300種類を超える植物が自生しています。中にはオグラセンノウ、ビッチュウフウロ、ミコシギクなど貴重な植物が多数生育し、これは、標高550mの中層地にある湿原としては極めて珍しく、「鯉が窪湿生植物群落」として昭和54年国の天然記念物に指定され、新見市哲西町が保護管理にあたっています。

鯉が窪湿原は「西の尾瀬沼」とも形容される湿原ですが、尾瀬沼に比べると標高は1000m以上も低く、多彩な植物が自生しています。特に満朝系の植物であるオグラセンノウ、ビッチュウフウロ、ミコシギク等、かつて日本が大陸と陸続きであったころ、満州、朝鮮、日本と広く分布していたと考えられる植物であり、しだいに離ればなれに分布するようになったもので、これらの植物は残留植物とよばれ、滅びゆく運命にあると考えられている植物です。その中でもオグラセンノウは、この鯉が窪湿原周辺と北九州、朝鮮北部だけにある貴重な植物です。

鯉が窪湿生植物開花時期一覧表（平成16年4月1日調整）

植物名	5月			6月			7月			8月			9月			10月			過去の開花年月日				
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年
リュウキンカ	●	●																	4.18	4.23	4.22	4.15	4.20
サワオグルマ		●	●	●																			
ハンカイソウ					●	●	●												6. 7	6.15	6. 7	6.10	6.10
ノハナショウブ						●	●	●											6.22	6.23	6.19	6.17	6.21
トキソウ					●	●	●												6. 4	6. 5	5.31	5.31	6. 4
コバギボウシ							●	●	●	●									7.12	7.10	7.11	7. 5	7. 6
オグラセンノウ								●	●	●	●	●							7.17	7. 4	7. 6	7. 5	7.10
コタヌキモ							●	●	●														
ヒツジグサ		●	●	●	●	●	●	●	●	●									7. 2	6.15	5.28	5.15	6.10
クサレダマ							●	●	●	●									7. 2	7. 1	6.27	6.27	6.27
アギスミレ					●	●	●	●															
ドクゼリ									●	●	●												
シモツケソウ							●	●	●	●									7. 2	7. 1	6.29	6.27	6.28
コバノトンボウ									●	●	●	●	●										
エゾミソハギ									●	●	●	●							7.25	7.28	7.11	7.15	7.20
カキラン							●	●	●	●									7. 4	7. 7	6.27	7. 3	7. 6
サワギキョウ										●	●	●	●	●	●				8. 4	8.13	8. 8	7.30	7.12
サギソウ									●	●	●	●							7.31	7.28	7.21	7.23	7.27

植物名	5月			6月			7月			8月			9月			10月			過去の開花年月日				
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年
ミミカキグサ										●													
ムラサキミミカキグサ										●	●	●											
ホザキノミミカキグサ										●	●	●											
モウセンゴケ									●	●	●	●	●										
ムカゴニンジン											●	●	●	●	●								
ヒメシロネ											●	●	●										
アギナシ									●	●	●	●	●						7.29	7.31	7.30	7.16	7.21
ビッチュウフウロ										●	●	●	●	●					7.11	7.20	7.11	7.27	8.22
キセルアザミ											●	●	●	●					8.18	8.13	8.17	8.13	8.23
シラヒゲソウ											●	●	●	●					8.22	8.16	8.15	8.14	8. 9
サワヒヨドリ												●	●								8.15	8.17	8. 3
ミズオトギリ												●	●										
ミヤコアザミ												●	●	●							9. 5	9.13	9. 8
タムラソウ													●	●							8.15	8.29	8.28
スイラン															●	●	●		9.12	9.14	9.14	9.13	9.17
ヤマラッキョウ															●	●					10.1	10.6	10.7
アケボノソウ															●	●	●		9.12	9.20	9.14	9.13	9. 8
ミコシギク														●	●	●			9.20	9. 4	9.21	9.23	9.17

鯉が窪湿原の植物は何万年も何十万年もかかって試練に耐えて、今ここに生きている植物です。自然を守るためには人間の様々な努力が必要です。植物が歩んできた長い歴史を思い浮かべ、後から訪れる人々の期待を裏切るような事はしないでください。湿原に咲き続けてこそ湿原の植物です。